

## 纏向遺跡の尺度と年代問題

新井宏

昨年十一月、纏向遺跡の発掘概要が桜井市教育委員会によって発表され、東西に直線状に並ぶ建物群の配置関係や桁行・梁行が明らかにされた。その中でも、建物Dと名付けられた東西四間(一九・二<sub>尺</sub>)、南北四間(一二・四<sub>尺</sub>)の大型建物は「卑弥呼の宮殿か」とすると見解もあり、大きな反響を呼んでいる。

実は、筆者にとっても、このニュースは極めて衝撃的なものであった。待ちに待っていた「尺度を語り得る最古の遺跡」がここに出現したのである。何よりも、整然とした配置関係と大型建物Dの桁行・梁行の計測値は、従前の古墳などの計測値に較べると、精度の点で、はるかに良質である。早速、現地説明会の資料を入手し解析を試みた。

そして、その解析結果も衝撃的であった。とにかく、この建物群は、纏向地区に存在する纏向石塚古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳、箸墓古墳、さらには近辺にある崇神陵(行燈山古墳)、景行陵(渋谷向山古墳)、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳などと共に、疑問の余地のない形で「古韓尺」に一致したのである。同時期の中国尺「後漢尺」や「魏尺」は全く合わない。

そして、「後漢尺」や「魏尺」が「纏向遺跡では使われていなかった」という結論は、纏向遺跡の年代観についても貴重な資料を提供することになった。

筆者がコンピュータ解析によって見つけ出し、文献や土地制度史の研究によって裏付けた古韓尺は、二十年を経て、ようやく認知を受けたばかりである。その「古韓尺」が、このような劇的な形で再確認できるのは、まさにツキである。

だから、いま気分が高揚している。一般の方にとっては、「古韓尺が使われていた」という事実の紹介だけで十分であろうが、ここは『計量新報』である。やはり、スペースを頂いて古韓尺の一致状況を別表に示して置きたい。

さて、このような結果は、日本の考古学にとっても重大な影響をもたらす。もともと、日本の前方後円墳の源流が高句麗にあったとするのは有力な学説である。それが、古韓尺を媒体として、ますます注目されるからである。

そうなると、一部の考古学者が年代をどんどん繰上げていた纏向遺跡は、やはり旧来の年代観の方が正しかったことになり、纏向遺跡の建物を卑弥呼の館、箸墓古墳を卑弥呼の墓とする主張は完全に霧散してしまう。それと共に、古墳築造に漢尺が使用されたという数多くの主張も再検討を迫られるのである。いわば地味な計量史の議論が、これから考古学界を揺さぶるはずなのである。

近日中に、きちっとした形で論文を発表する。その前に、『計量新報』に紹介するのも何かのご縁であろうか。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)

纏向における古韓尺(26.7cm)の一致度

	長さ m	古韓尺(26.7cm)			差	適合
		尺	歩	m		
A建物 東西	4.8	18	3	4.8	0	◎
B建築 南北	5.2	20		5.3	0.1	○
	4.8	18	3	4.8	0	◎
C建築 東西 3間	8.0	30	5	8.0	0	◎
	5.3	20		5.3	0	◎
D建築 桁行 4間	19.2	72	12	19.2	0	◎
	6.2	24	4	6.4	0.2	○
建物Bと建物Cの間隔	5.2	20		5.3	0.1	○
建物Cと建物Dの間隔	6.4	24	4	6.4	0	◎
建物Bの両側の柵間	8.0	30	5	8.0	0	◎
建物C部の柵間	26.8	100		26.7	0.1	◎
纏向石塚 墳丘長	96		60	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎
	前方長	32	20	32	0	◎
纏向矢塚 墳丘長	96		60	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎
	前方長	32	20	32	0	◎
東田大塚 墳丘長	96		60	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎
	前方長	32	20	32	0	◎
箸墓 墳丘長	288		180	288	0	◎
	後円径	160	100	160	0	◎
	前方長	128	80	128	0	◎
ホケノ山 墳丘長	80		50	80	0	◎
	後円径	55	35	56	1	○
	前方長	25	15	24	1	○